

常夜国騎士譚RPG ドラクルージュ

誰がために薔薇は咲く

作成：lib14

◆シナリオ諸元

推奨プレイヤー人数：3人（2人可）

推奨PC逸話数：1

篇：1

物語の概要

●物語の背景

ロッテンシュロス城。優美絢爛に薔薇が咲く。その城主たるヴィレーム卿の、悪鬼退治の武勇の勲^{いさお}は、常夜中に轟き渡っていた。

PC①という近衛にも恵まれ、共にトロール退治をすれば民からは慕われ、紅き城の薔薇は益々咲き誇った。

ヴィレーム卿の治めるホーニヒガルテン領に美しき賢者が身を寄せた。名をエリス卿という。慈悲深いヴィレーム卿は放浪の騎士を招き、保護した。薔薇蜜卿の二つ名を持つ彼女は民らに養蜂の技術を伝え、ホーニヒガルテンは栄えた。

だがある日、ホーニヒガルテンの領主が民を虐げているという噂が広がった。領主といえばヴィレーム卿しかいない。誰かがホーニヒガルテンの繁栄を妬んで言いふらしているのだろうか。それとも真にヴィレーム卿は不徳を成したということなのだろうか。

ロッテンシュロス城の薔薇は咲く。紅く、紅く。

●NPCの設定

▼ヴィレーム卿（紅城卿）

トロール退治で名を馳せた騎士にして、麗しき美青年。彼の二つ名となった^{ロッテンシュロス}紅城は、ヴィレーム卿の武名を讃えて領民らが築いたものである。

だが最近、何者かによって民を虐げているとの噂が広められている。

▼エリス卿（薔薇蜜卿）

最近ヴィレーム卿に仕えるようになった賢者で、乙女の姿なれど騎士歴は1200年以上。かつての主を失ったため、紅城に身を寄せることとなった。

二つ名は、薔薇蜜のような甘い体臭に由来する。

薔薇の意味

ヴィレーム卿の言う薔薇とは民のことである。領主の為に薔薇は咲き、蜜となる宿命にある。否、騎士道にあらず。

薔薇とは騎士を指す。民の為に薔薇は咲き、民草を守るのが騎士の本懐だ。

一、騎士は民草を守らねばならない
城を築くは民なり。酒食を造りしは民なり。
また新たなる騎士は必ずや民より選ばれん。
民こそ領地を生みたるドラクルの子と知れ。

——騎士の誓い（P113）

そして、このシナリオにおける薔薇とは近衛たるPC①のことである。主人の為か、それとも民の為か。美しい薔薇は一体誰の為に咲くのだろうか？

●ハンドアウト

▼PC①

消えざる絆：ヴィレーム卿【主】

推奨の道：近衛

序言：彼は貴卿の主である。彼が遍歴の頃より彼に従い、トロール退治にも加わった。そして彼から叙勲を受けた。しかし、彼が民を虐げているという噂を耳にした。何者かがその噂を流しているようだ。紅の宮廷は民らの信の証。忠臣として、主の名誉を辱める輩を捜し出さねばなるまい。

▼PC②

消えざる絆：ヴィレーム卿【仇】

推奨の道：遍歴

序言：貴卿は旅の道中、不徳の騎士の噂を聞いた。その名はヴィレーム卿。かつては武名を馳せた騎士なれど、騎士としての本懐を忘れ、あろう事か、民らを虐げているようだ。如何なる時も三つの誓いを忘れるなかれ。墮落に向かう騎士を救わねばなるまい。

▼PC③

消えざる絆：エリス卿【侮】

推奨の道：賢者

序言：かつて貴卿は彼女と共に同じ主に仕えていた。貴卿がPC②の力を借りて墮落した主を封印して戻ると、城には誰も残っていなかった。貴卿にとって彼女の名は久しぶりに聞く名だ。気がかりな点はあるが、ともかく、無事に主を封印できた事は報告しなければなるまい。

▼PC②（PC人数が2人のとき）

消えざる絆：エリス卿【侮】

推奨の道：遍歴・賢者

序言：かつて貴卿は彼女と共に同じ主に仕えていた。貴卿が墮落した主を封印して戻ると、城には誰も残っていなかった。貴卿にとって彼女の名は久しぶりに聞く名だ。しかも、領主が民を虐げているとの噂があるホーニヒガルテンに身を寄せているという。貴卿の脳裏に墮落したかつての主が過ぎった。

人数に応じたアレンジ

プレイヤー2人で遊ぶ場合、PC人数が2人のときのハンドアウトを使用する。基本的に本シナリオはPCが3人の場合を想定して演出などを書いている。よってPC人数が2人のときは適宜アレンジを加えながら演出してほしい。基本的に2人版のPC②は3人版のPC②とPC③の立場を併せ持っていると考えてほしい。

●物語の真相

エリス卿の正体は冥王軍の死の乙女（P260）である。エリス卿は民を薔薇に変えて造った蜂蜜をヴィレーム卿に与えていた。PC③の元主人もエリス卿によって墮落に導かれた。

エリス卿によって墮落しつつあるヴィレーム卿はロッテンシュロスの薔薇園に領民たちを集め、彼らの蜜を吸るのだった。まるで吸血鬼のように。

●NPCの真相

▼ヴィレーム卿

かつては領民に慕われた領主であったが、PC①によって実質、その座を奪われた。領民の心はPC①にありと、少なくともヴィレーム卿はそう思っていた。妬みと己への怒りで渴きが募りし頃、エリス卿が彼を受け入れてくれたのだった。

ふしだらな薔薇の蜜を口にしたせいで潤い足りぬ体になってしまい、民から蜜を搾り取るようになった。

▼エリス卿

名を、エリス・クロードディア・ヴァイスシュテルン・フォン・ノスフェラスという。冥王軍の騎士にして、ヴィレーム卿の愛人。

エリス卿は冥王の力によって歪められた騎士の末路である。本来はクロードディアに仕える心優しい近衛であったが、冥王軍の一員となってからは、ノスフェラス家を救おうとせず、のうのうと暮らしている他の騎士たちを妬み、歪んだ心から、彼らを墮落させることを喜びとしている。

とりわけ克己心の強い騎士や、墮落狩りの騎士、そしてヴィレーム卿のように民から慕われている騎士が墮落することを期待して用意周到な作戦を立てるのである。エリス卿は墮落に向かう騎士を心から愛している。

▼渡し守のペーター

街道からホーニヒガルテン領へ赴くには運河を横断しなければならぬ。その渡し守をしているのがペーターという男だ。

民がヴィレーム卿を讃えて造った紅き城を誇りに思い、生まれ育ったホーニヒガルテンを心の底から愛している。旅人にホーニヒガルテンの魅力を一番に伝えられる渡し守という役目も誇りに思っている。

本シナリオにおいては、守るべき民を象徴する存在として位置づけている。

■シナリオマップ

▼序の幕

渡し守のペーター

▽導入

紅き城にやってくるPC達

▼常の幕

ヴィレーム、エリス

▽幕間

エリス卿に誘われて執務室へ

▼戦の幕

エリス、墮落した騎士たち

▽幕間

館の外から大きな声が・・・

▼終の幕

ヴィレーム、民たち、渡し守のペーター

民の蜜

薔薇の園。ヴィレーム卿がその憂いを含んだ^蜜で民を見つめると、民たちは恍惚とした顔で立ち竦む。卿は働き者に労いの言葉を掛けると彼の手を取った。領主の薄い唇が、豆だらけの手首に触れる。

やがて彼らは、体中から甘き蜜を垂れ流し、その場に倒れ伏す。歓喜の表情を浮かべたまま、薔薇の花びらとなって散ってゆく。ヴィレーム卿が去った後は、蜂たちがブンブンと蜜を集めるのみであった。

こうして集められた蜜は、渴きを癒す至高の飲み物として水晶の瓶に込められた。かつて太陽がありし頃、吸血鬼と蔑まれた騎士たちが頂く贅沢であった。一度でも民の蜜を味わった騎士は、その味が忘れられなくなるに違いない。

本編

序の幕

●PC①の導入

貴卿は領内の見回りをしている。領主が政務で忙しいときは、貴卿が領主に代わり、トロールのような悪鬼が領民を襲っていないか見回りをしているのだ。

ホーニヒガルテンの領境にある河の畔までやって来た折、一人の渡し守が貴卿に挨拶してきた。ペーターというその渡し守は郷土愛の強い男で、貴卿をいたく尊敬している様子だった。

「見回りで御座いますか騎士様。ありがてえことです。このところ領主様の代わりにPC①様が見回りに来て下さっているので助かっています。それはそうと領主様のことで良からぬ噂を耳にしました」

「曰く、ホーニヒガルテンの領主が民を虐げているとか。……いやまったく、永遠なる薔薇の城の主がそのような事をするはずがありません。きっとホーニヒガルテンの繁栄を妬んだ余所者が広めたデマでしょう」

「ああいや、騎士様がお気を悪くするのも無理はありません。あっしだって、尊敬する領主様が悪く言われて気分がよくなるはありませんから」

「あっしは何時でも騎士様の味方です。トロール退治でも何でも、騎士様のお力になりますから、いつでも呼んでつかあさい」

●PC②と③の導入

貴卿らは旅の道中、ホーニヒガルテンに立ち寄った。領境の運河を渡る途中、渡し守からホーニヒガルテンの話を開かせてもらっていた。

「ホーニヒガルテンの領主、ヴィレーム卿は悪鬼を懲らしめ、武名轟く偉大なお方。我らホーニヒガルテンの民はその栄光を永遠に讃えようと考え、紅き城、ロッテンシュロスに領主に献上したのです。」

この渡し守はまるで自分の事のように話していた。

「ロッテンシュロスの薔薇園は、それはそれは美しく、一度行けば忘れられないことでしょう。それに近頃はエリス様という賢者様がいらっしゃり、蜂を使って薔薇の蜜を集める養蜂の技術をホーニヒガルテンにもたらしてくれました。ホーニヒガルテンは益々繁栄を極め、今に至っているというわけです」

「ところが最近、領主様について良からぬ噂を耳にします。曰く、民らを虐げていると。このところ、見回りをPC①様にお任せになって、領主様のお姿はとんと見かけておりませんが、きっとお忙しいのでしょうか。紅き城の絆は永遠です。大方、ホーニヒガルテンの繁栄を妬んだ者が触れて回っているのでしょうか。さあ、着きましたよ。騎士様がお二方もホーニヒガルテンにおいで下さるとは光栄なことです。さ、足元にお気を付けください」

篇

■常の幕

◆幕の諸元

●NPC

[脇役] ヴィレーム卿 (存在点: PC 数×2)

[脇役] エリス卿 (存在点: PC 数×2)

行動値はPC人数×10をNPCで割り振る。

ヴィレーム卿は1ラウンド終了後に退場する。

●壁の葦

ヴィレーム卿: 館の外へと退場する。

エリス卿: 執務室に来るように言って退場する。

●場所

▼庭園 (薔薇の庭園)

・PC

▼宮廷 (ホール)

・PC/ヴィレーム卿/エリス卿

▼玉座 (執務室)

●伴奏

エリス【俺】

●口上

薔薇の匂い満ちる麗しの庭に鳥が囀る。

威風堂々たるロッテンシュロスはヴィレーム卿の

武名を讃える。

貴卿らが使用人部屋を横切り、暖炉のあるホールへと向かうと、城主ヴィレーム卿はいずこかへと向かおう扉に手を掛けていたところだった。暖炉の前の長椅子にはエリス卿が腰掛けていて、貴卿らの訪問に驚いた様子もなく、にこりと微笑むのだった。

●解説

PCたちがNPCから真相を問いただす常の幕。ヴィレーム卿は「私が民を虐げるようなことをするはずがない」と言い、相手にしない。「すまないが急いでいる」と言って、1ラウンド終了時もしくは[壁の華]になったときに退場する。

エリス卿はPCたちの質問をはぐらかす。PC①に対しては、同じ主君に使える者として主を疑うことを嗜める。

PC③に対しては再会を喜ぶとともに、PC③を労り、PC③がヴィレーム卿にお仕えできないか主に掛け合おうかと提案してくる。PC③が自分たちに代わってかつての主を封印してくれたことを感謝する。同じ立場にいた騎士たちについては「分からない」と答える。

PC②のことは知らないで、「初めまして、ようこそロッテンシュロス城へ」と応接する。

2ランドが経過するか、エリス卿を[壁の華]にすると「あなた達に見せたいものがあるから、ヴィレーム卿の執務室にいらっしゃい」と言葉を残して幕から退場する。

●注意

ここでは特に情報は明かさない。[潤い]を得ること以外に、脇役を[壁の華]にする意味は特でない。

●幕間の処理

通常通り処理する。

かつての主

PC③および、エリス卿のかつての主について特に設定はない。PC③のプレイヤーが自由に設定して構わない。

■戦の幕

◆幕の諸元

●NPC

[脇役] エリス（存在点：PC数×5）

行動値はPC数×10-2

[端役] 墮落した騎士（護衛役）×2

●壁の華

エリス：時を待たずに断罪公がやって来るだろう。

●場所

▼庭園（薔薇の庭園）

▼宮廷（ホール）

・PC

▼玉座（執務室）

・PC/エリス/墮落した騎士×2

●伴奏

エリス【怒】

●口上

エリス卿に呼ばれホールの奥の執務室に向かうと、貴卿らは甘い匂いに包まれた。その匂いは心地よく、^{ほろ}気怠げな気分と共に、緊張が解けてゆく。

ヴィレーム卿の机の引き出しからガラス瓶を取り出し、蓋を開けるエリス卿。瓶の中の琥珀色の液体に指を絡めると、薄く濡れた唇を半開きになった。流し目で貴卿らに視線を送ると、鼻息交じりに喉の奥から甘い音が漏れる。

「これは蜂蜜。薔薇の花の蜂蜜。ただちょっと違うのは、ホーニヒガルテンの民から搾り取った蜜だという事かしら？ 彼らは私たち騎士に対して色々な捧げ物をしてくれるわ。もちろん、自らの命もね。かつて私たち騎士が『吸血鬼』と蔑まれていた時代、蜂蜜は貴重な潤いの源だったの。それは今も変わらない。この味を知ってしまったら止められなくなるわ。」

指先から甘い蜜が^{とろ}湧ける。エリス卿は舌を出し、指先まで丹念に平らげる。

「さあ、貴卿らにも是非この味を味わって欲しいわ。ヴィレーム卿もお気に入りの味よ。そして彼らも、この味を忘れられなくなってしまったのね」

見れば、エリス卿を取り巻くように、PC①と同じくヴィレーム卿の近衛の騎士と、そしてかつてPC③と共に主に仕えていた騎士が姿を見せていた。

●解説

エリス卿と戦闘をする幕である。PCたちがエリス卿の誘いを断ると、彼女は死の乙女としての姿を現し、秘密を知った者を始末するため、PCたちに大鎌を向ける。死の乙女となったエリス卿には漆黒の翼が生える。

また、端役の墮落した騎士たちはPC①の同僚と、PC③の元同僚である。彼らはエリス卿に心酔しており、彼女を全力で守る。

●注意

特になし。

●幕間の処理

通常通り処理する。

終の幕

◆幕の諸元

●NPC

[脇役] ヴィレーム (存在点: PC数×10)

行動値はPC数×12

[端役] 服う民 (兵士役) ×3

[端役] 渡し守のペーター (喝采役) ←味方陣営

●壁の華

ヴィレーム: 地獄に封印される。

服う民及び、ペーターはヴィレーム卿によって「壁の華」にされた場合、蜜となる。PC側が「壁の華」にした場合、PCの演出に合わせて結末を決める。

ペーター: ヴィレーム卿の陣営によって「壁の華」にされた場合、ヴィレーム卿に心奪われ、命を差し出してしまふ。

●場所

▼庭園 (薔薇の庭園)

・PC/ヴィレーム卿/服う民/渡し守のペーター

▼宮廷 (ホール)

・PC

▼玉座 (執務室)

●伴奏

ヴィレーム卿【仇】

●口上

「ギャーッ！！」

館の外から男の声がした。

「りよ、りよ、領主さま！ な何てことっすだ!？」

ロッテンシュロス城の薔薇園の方からだ。

貴卿らが薔薇園へ向かうと、何人もの領民が茨の前に倒れ伏し、恍惚とした表情を浮かべながら体中から蜜のようなものを滴らせている。

ヴィレーム卿に心酔した様子の領民たちは、我先にとヴィレーム卿に群がり、彼の口づけを待っている。そして、彼が民に口づけをするたびに、領民たちはその場に倒れ伏してゆくのであった。

ヴィレーム卿は貴卿らの存在に気づくと、長い髪を掻き上げ、貴卿らの方を振り向く。だがその姿は既に墮落の兆しが顕れていた。

「りよ、領主さま、お止め下せえ」

「確かキミは渡し守のペーターだったね。知っているよ。ホーニヒガルテンの民の名は全てね。心配することはない。私と一つになるのだ、気持ちいいぞ。いい所に来た、PC①卿、共に彼の蜜を頂き、渴きを癒そうではないか？」

山羊頭の領主はそう、PC①に問い掛けるのだった。

●解説

落ちたヴィレーム卿と戦うシーンとなる。ヴィレーム卿は蜜の味が忘れられないでいる。PC①は説得を試みるかも知れないが、もはや無意味である。

「ここまで落ちてしまっちは、ゲルギアンナ公の懐に委ねるしかない」と説明しよう。存在点を0点にして地獄に封印するしかないということだ。

PC①がヴィレーム卿との対決姿勢を明らかにすると、戦いの中で、ヴィレーム卿はPC①への嫉妬と渴き、そしてエリス卿に心惹かれていったことなどを吐露する。

ヴィレームに心酔している民たちは兵士役として、PCたちにノワールを与える。「主」はヴィレーム卿である。

実はペーターはPC①に心酔しているためヴィレーム卿の前で正気でいられる。ペーターは「主」を持たない味方側の端役(喝采役)として扱う。

●注意

特になし。

●幕間の処理

通常通り処理する。

後の幕

戦の幕でエリス卿の存在点が残っていた場合、ヴィレーム卿との戦闘の後、館に戻ってみるとエリス卿の姿が消えていることに気づく。彼女はまたどこかで別の騎士を墮落させようとしているのだろうか。

戦の幕でエリス卿の存在点を0にした場合、ヘルズガルド家のPCもしくは、マルグリット公(P134)がエリス卿を地獄に封印する。

渡し守のペーターが生き残っている場合、ペーターはPC①に領主の座を継ぐように懇願する。引き受けるか引き受けないかはプレイヤーが決める。

渡し守のペーターがヴィレーム卿の虜になっていた場合、守るべき民草がいなくなったという侘びしさが紅き城を包み込む。

データ

■ヴィレーム卿

墮落寸前 (P257) を使用する。

■エリス卿

死の乙女 (P260) を使用する。

熟練度に応じたアレンジ

プレイヤーが慣れた人たちならば、脇役の存在点を戦の幕では+5、終の幕では+10してもよい。